

飛鳥研究学史 (1991～2000)

－ 調査研究の現状と課題 －

相原 嘉之

I. はじめに

21世紀を迎え、多くの変革の時代を迎えている今日、我々の明日香村も大きな変革の渦の中にある。文化財の調査研究や文化財行政も例外ではなく、多くの課題を抱え、変化を要求されている。しかし、明日香村の地下には、飛鳥文化が花開いた歴史が刻まれており、地上には歴史的風土と呼ばれる景観が広がっている。これらは古都保存法及び明日香村特別措置法によって守られているが、飛鳥文化の解明と共に、これらの文化遺産を次の世紀へと正しく伝えることも、我々に課せられた大きな責務である。

本稿では、飛鳥の研究史を振り返ることにする。今なぜ飛鳥の研究史を整理するのか？それにはいくつかの理由がある。飛鳥の解明は、昭和8年の石舞台古墳の調査にはじまり、1956年以降は飛鳥寺跡・川原寺跡・伝承飛鳥板蓋宮跡をはじめ継続的に本格的な発掘調査が進められてきた。その成果は新たな事実を次々と提示し、これまでの常識を塗り替えてきた。筆者は以前に飛鳥の発掘調査の歴史を振り返る簡単な図録を作成したことがある（明日香村2003）。その中で、近年の発掘調査成果については目を見張るものがあることを改めて痛感した。研究史を整理することは、現在の研究の到達点を確認することであり、次の研究への課題を明確にし、確かなステップとするものである。本調査研究紀要の創刊の目的でもある飛鳥文化の解明に向けても、極めて意義のあるものと考えている。

しかしながら飛鳥研究の歴史は長く、さらに関連諸分野は極めて広範囲にわたる。これらを総合的・網羅的に簡要にまとめる力量は筆者にはない。そこで、その対象を限定せざらう得ない。まず今回扱う地域は飛鳥文化の中心ということもあり、飛鳥を中心として藤原京地域までのエリアを設定したい。現在の行政区としては明日香村と高取町・橿原市・桜井市の一部ということになるだろうか。その研究領域は筆者が埋蔵文化財の調査研究に携わっていることもあり、この分野が主流をなす。ただし、出来る限り関連諸分野の研究にも言及したい。時代設定は飛鳥文化、つまり7世紀を中心として、それ以前・以降についても触れたい。また研究史の時期であるが、1991年から2000年までの10年間を今回の対象とする。これにはいくつかの理由があるが、まずこの10年は飛鳥の調査において極めて多くの研究があり、それはその前の10年よりもはるかに大きな成果があったことによる。また、当時筆者が奈良国立文化財研究所に入所したのが1990年であり、飛鳥地域の調査・研究に関わりをもつようになったこともそのひとつの要因である。

以上の理由によって、本稿で扱う研究史は、ここ10年間における飛鳥を中心とした飛鳥時代の埋蔵文化財に関する調査研究を総括することにする。なお、記述の都合上、研究者の敬称は全て省略した。お許し願いたい。また、今後の利用の便を考え、当該年間の文献目録も付した。まだ遺漏も多いと思われるが、ご教示・ご指摘をいただきたい。

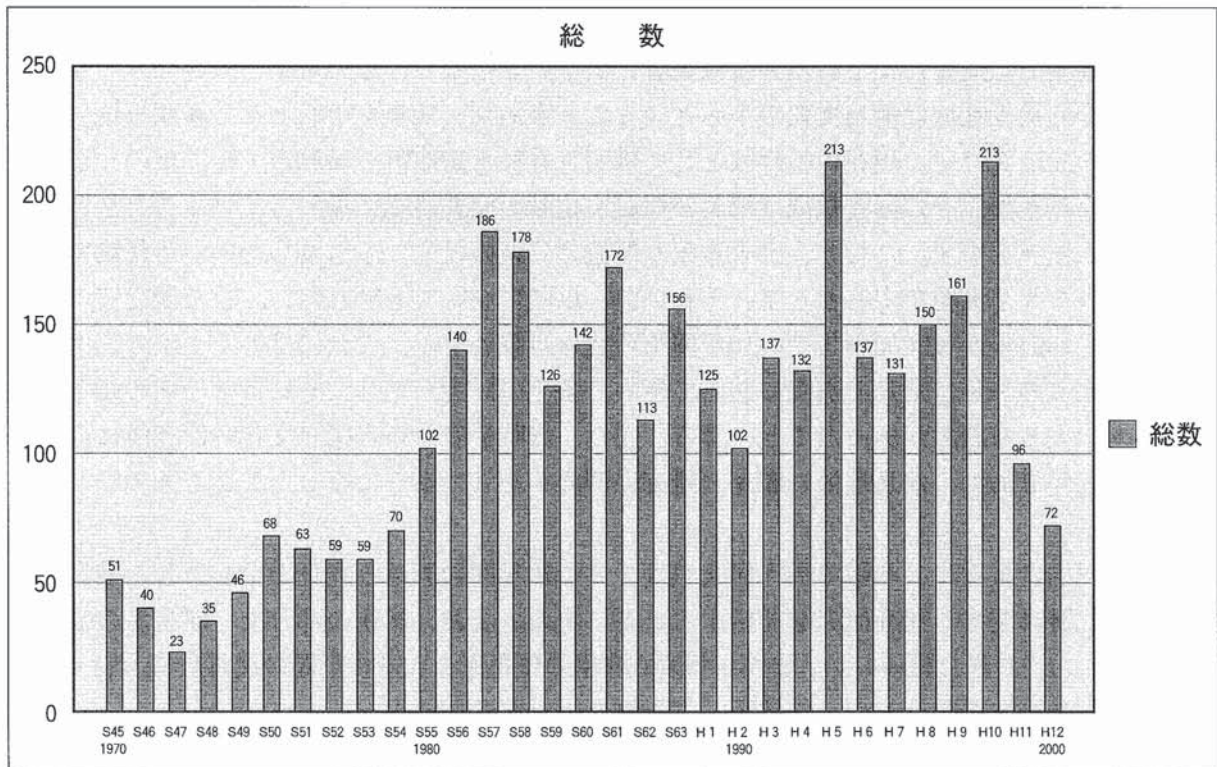
Ⅱ. 発掘調査の動向

開発の動向

明日香村は古都保存法・明日香村特別措置法によって、村内全域が文化財保護法の周知の埋蔵文化財包蔵地になっており、すべての開発行為に対して埋蔵文化財発掘届け及び風致申請書が必要となってくる。したがって、住宅・倉庫の新・改築や土地造成、公共事業、電気電話等の電柱の建て替えなど様々なものがある。

全国の埋蔵文化財発掘届出件数はバブル景気の影響を受け、1992年度にピークに達し、その後徐々に減少に向かっている。一方、公共事業はやや後半にずれており、1997年度にピークに達しており、その後は急激に減少をする（日本考古学協会2005）。明日香村内における埋蔵文化財発掘届出件数は、バブル景気の大きな影響も受けず、1970～1979年度まではほぼ50件を前後する数字で推移していたが、1980年度からは100～150件になり、1983年度には180件を超える。その後、130件を前後する数値で推移していたが、1993年度及び1998年度には200件を超えた。全国における傾向は、前出の規制によって開発による発掘届出件数には反映されないが、1982年度と1998年度には電気工事関係の伸びが著しい。これはいずれも台風等による災害復旧に関わるもので、一時的な緊急工事である。これを除くと1993年を中心としてピークがみられる。これは主として下水道関連の工事と道路工事、電気工事の増加が要因となっている。

これらの発掘届に対応して、明日香村内では明日香村教育委員会と奈良国立文化財研究所（現奈良文化財研究所）、橿原考古学研究所がその発掘調査・立会調査の対応をしている。奈良県（橿原考古学研究所）は1933年の石舞台古墳の後は、1960年の伝承飛鳥板蓋宮跡から本格調査を開始し、奈良国立文化財研究所は一時中断期間はあるが1956年より飛鳥地域の調査に参画している。明日香村はこの中で最も後発であるが、1980年から独自の調査を始めた。



第1表 明日香村内発掘届出件数の推移

発掘調査の動向

この10年の飛鳥地域の発掘調査は、奈良国立文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所・橿原市教育委員会・桜井市教育委員会・高取町教育委員会と明日香村教育委員会によって実施されてきた。ここでは各年度ごとの調査の概要について、まとめておきたい。

平成3年度（1991）には、飛鳥京跡と雷丘北方遺跡、飛鳥池遺跡の調査と見瀬丸山古墳が注目された。飛鳥京跡では前年に検出したエビノコ郭南限堀の成果を受けてさらに南側と西南部の調査が実施された。従来の推定に反してエビノコ郭は南北が短い。ここではⅢ期の遺構を確認できなかったが、Ⅱ期やⅠ期に遡る建物、石敷を確認している。これらの成果によりエビノコ郭南側の土地利用の一端が明らかとなった（橿考研1992）。雷丘北方遺跡は、雷丘の北方の藤原京左京十一條三坊にあたる。住宅の造成に伴う事前調査で、この地域では初めてまとまった調査を行うことができた。調査の結果、四面庇の大型建物と回廊状の脇殿が検出された。正殿は柱間寸法が12尺で、藤原京域の宅地では最大規模を誇る建物で、敷地は同西南・西北坪の二町占地をもつことが明らかとなった。さらに南に隣接して計画されていた県道の建設予定地では、この成果を受けて確認調査が実施され、回廊状建物が長大な脇殿と判明し、正殿を取り囲むように廊状建物がめぐる、皇子級の邸宅と推定された（奈文研1992a）。石神遺跡では1980年以來、計画的に調査を実施してきているが、この年初めて西区画の調査に入った。調査では水落遺跡との境界の堀を確認するが、途中に通路があり、両遺跡は一体となって利用されている。また水路網が石神遺跡内部へと続くことも判明した（奈文研1992a）。飛鳥池遺跡は近世飛鳥池の埋め立てに先立ち、明日香村教育委員会が試掘を行い、確認された遺跡である。鑄造関係の様々な遺物と遺跡の重要性から、奈良国立文化財研究所との合同調査で本調査が行われた。そこではガラス・銅・漆製品をつくる総合工房であることがわかってきた。また、寺院関係では、坂田寺跡と本薬師寺跡の調査も注目される。坂田寺跡ではこれまでに奈良時代の金堂跡とその背後に鎮壇具を持つ建物（講堂？）が確認されていた。今回の調査は公園整備に伴うもので、前年度に引き続き、金堂に取り付く回廊を確認している。ここでは山田寺跡同様に回廊建物が、倒壊した状態で検出されている（奈文研1992a）。また、本薬師寺跡は飛鳥藤原地域でもこれまで手つかずであった当寺院の解明に向けて実施された確認調査である。すでに金堂礎石が原位置で残っていたが、金堂基壇も良好に残っていることが確認できた（奈文研1993a）。

一方、橘寺の西南方では中山間地域農業基盤整備に伴う西橘遺跡の大規模な調査がはじまった。当年度はまず、亀石の南側で飛鳥時代並びに中世の柱穴等が確認されている（明日香村1992a）。そして見瀬丸山古墳では一般人によって石室内部の写真が公開された。そこには長大な石室と二つの石棺が映し出されていた。

平成4年度（1992）には酒船石の丘陵で石垣が発見された。天理砂岩を用いたその遺構は、位置・構造・材質から、斉明紀「宮の東の山の石垣」に該当する遺跡と推定され、翌年度からは調査委員会を設けて範囲確認調査を開始した（明日香村1994a）。また、酒船石遺跡に隣接する飛鳥寺南方遺跡では公共下水道に伴う調査で、幅2mの石組溝を検出し、この地域の基幹水路であると同時に、これと重複した石組暗渠からベニバナの花粉を大量に検出、上流に染色にかかわる施設が推定された（奈文研1995c）。飛鳥京跡の調査としては飛鳥寺と伝承飛鳥板蓋宮跡の中間地域が調査され、飛鳥浄御原宮の官衙と推定される建物や石組溝、さらに木簡が出土しており、この地域の土地利用の一端が明らかとなった（橿考研1993）。紀寺跡では東門（橿考研1993）を、本薬師寺跡では中門を調査したが、中門の下層から条坊道路を検出し、藤原京

平成3(1991)年度	飛鳥京跡(エビノコ郭南・西南部) [榿考研]・石神遺跡(西区画) [奈文研] 東山マキド遺跡 [明日香村]・雷丘北方遺跡 [奈文研]・飛鳥池遺跡(工房) [奈文研] 坂田寺跡(回廊) [奈文研]・本薬師寺跡(金堂) [奈文研] 見瀬丸山古墳(石室内写真)
平成4(1992)年度	飛鳥京跡(内郭北方) [榿考研]・酒船石遺跡 [明日香村] 西橋遺跡 [明日香村]・藤原京(トイレ遺構) [奈文研]・横大路 [榿考研] 飛鳥寺南方遺跡 [奈文研] 本薬師寺跡(中門) [奈文研]・紀寺跡(東門) [榿考研]・飛鳥寺跡(東南禅院) [奈文研] 見瀬丸山古墳 [宮内庁]
平成5(1993)年度	酒船石遺跡 [明日香村]・石神遺跡(西区画建物) [奈文研]・雷丘東方遺跡 [奈文研] 飛鳥寺(講堂) [奈文研]・本薬師寺跡(東塔) [奈文研]・川原寺跡(南大門) [奈文研]
平成6(1994)年度	水落遺跡(東南部) [奈文研]・酒船石遺跡(四重の列石) [明日香村] 雷内畑遺跡(苑池) [明日香村]・甘檜丘東麓遺跡 [奈文研] 豊浦寺跡(金堂) [榿考研]・橋寺(創建以前) [榿考研]・本薬師寺跡(回廊内) [奈文研] 上1号墳 [榿考研]
平成7(1995)年度	飛鳥京跡(内郭北方) [榿考研]・御園アライ遺跡 [明日香村]・桧前門田遺跡 [明日香村] 奥山久米寺跡(金堂・講堂) [奈文研]・橋寺跡(北門) [奈文研] 本薬師寺跡(西塔・回廊) [奈文研] カナヅカ古墳 [明日香村]
平成8(1996)年度	鳥庄遺跡(方形池堤) [榿考研]・川原下ノ茶屋遺跡 [明日香村] 水落遺跡(大型建物) [奈文研]・飛鳥池遺跡(開始) [奈文研] 土橋遺跡(西十坊大路) [榿原市]・上之庄遺跡(東十坊大路) [桜井市] 吉備池廃寺跡(金堂) [奈文研]・飛鳥寺跡(西門) [奈文研] 上2～4号墳 [榿考研]
平成9(1997)年度	飛鳥京跡(エビノコ郭北辺) [榿考研] 飛鳥池遺跡(木簡) [奈文研]・五条野向イ遺跡 [榿原市] 豊浦寺跡(回廊?) [榿考研]・吉備池廃寺跡(塔) [奈文研] キトラ古墳 [明日香村]・梅山古墳 [宮内庁]
平成10(1998)年度	飛鳥京跡(苑池) [榿考研] 飛鳥池遺跡(瓦窯・富本銭) [奈文研] 東山カワバリ遺跡 [明日香村]・酒船石遺跡(掘立柱塀) [明日香村] 豊浦寺跡(金堂) [明日香村]・坂田寺跡 [明日香村]・飛鳥坐神社 [明日香村] 上5号墳 [榿考研]・吉備姫王墓(猿石) [宮内庁]
平成11(1999)年度	飛鳥京跡(苑池) [榿考研] 酒船石遺跡(亀形石) [明日香村]・飛鳥池遺跡(富本銭鋳造) [奈文研] 五条野向イ遺跡 [榿原市] 八鈞・東山古墳群 [明日香村]
平成12(2000)年度	藤原宮跡(東第一堂) [奈文研] 石神遺跡(北限塀) [奈文研]・酒船石遺跡(湧水施設) [明日香村] 吉備池廃寺(中門) [奈文研] キトラ古墳(デジタルカメラ) [明日香村]・植山古墳 [榿原市]

第2表 飛鳥地域主要発掘調査一覧表(1991～2000)

条坊道路と本薬師寺の造営との前後関係に再検討を促している（奈文研1994）。飛鳥寺跡では寺域の東南隅で礎石建物を検出し、瓦の年代や位置から、東南禅院の可能性が高いことを指摘した（奈文研1993a）。また、藤原京右京七条一坊でははじめてトイレ遺構を科学的に確定することができた（奈文研1992b）。西橋遺跡では大量の木簡が谷から出土した（明日香村1993a）。見瀬丸山古墳では前年度の石室写真の公開に伴って、宮内庁により石室の記録がとられ、一部研究者に公開されている（宮内庁1994）。

平成5年度（1993）には、県道拡幅に伴って、雷丘東方遺跡が調査された。そこでは奈良時代の礎石倉庫が発見され、以前に出土していた「小治田宮」墨書土器とあいまって、遺跡の性格を補強した（奈文研1994）。石神遺跡では西区画の中核で、四面庇の大型建物を検出し、この遺跡の中心建物と推定される（奈文研1994）。飛鳥寺跡では講堂の北東部を調査、その構造を確認している（奈文研1994）。本薬師寺跡では東塔を（奈文研1995b）、川原寺跡では南大門を再調査している（奈文研1995b）。

平成6年度（1994）に飛鳥国営歴史公園内では、平吉遺跡に続いて本格的な調査を甘樫丘東麓遺跡で実施した。そこでは7世紀中頃の土器と共に、焼け落ちた建築部材が投棄されており、その位置や年代から蘇我蝦夷・入鹿の邸宅の可能性が示唆された（奈文研1995b）。酒船石遺跡では、丘陵西側裾で列石を確認し、遺跡は石垣や列石で4重にめぐることが判明した（明日香村1996a）。雷丘の南で7世紀中頃の庭園遺構がみつきり、皇極朝の小墾田宮との関連がとりだたされた（明日香村1996a）。豊浦寺跡では金堂を再発掘し、その東西規模や構造を明らかにしている（檀考研1995）。さらに橋寺境内では創建前の掘立柱塀を検出している（檀考研1995）。継続していた石神遺跡の調査はこの年から3年間、水落遺跡南東部に移る。この調査で漏刻台の周囲に廊状建物を取り囲むことが判明した（奈文研1995b）。一方、多武峰見瀬線の事前調査として細川谷古墳群の調査がこの頃から本格化した。本年度は横穴式石室の上1（66）号墳を確認した（檀考研1995）。

平成7年度（1995）は、飛鳥南西の御園・檜前地域の調査が相次いだ。御園アライ遺跡では4時期にわたる建物群が検出され、隣接地で行われていた御園チシヤイ遺跡との関係も注目される（明日香村1997a）。さらに檜前門田遺跡では、檜隈寺跡の東側で大規模な区画塀が検出され、邸宅を囲む塀の可能性が指摘された。これらの成果から、周辺では邸宅がいくつも建並ぶ景観が想定される（明日香村1997a）。飛鳥京跡の調査は平成4年度調査区に隣接する内郭北方地区で、石組溝・木簡などを確認している（檀考研1996）。本薬師寺跡の計画調査では西塔に発掘のメスがいり、西塔の建築が奈良時代まで下る可能性があることが判明した。これは両塔式の伽藍でも塔の建築に大きな時期差があることを示している（奈文研1997a）。橋寺では北門の再調査とその前面の東西道路が幅12mであることを突き止めた（奈文研1997a）。一方、奥山久米寺跡では下水道管理設に伴う調査で延長の長い調査区が設定され、金堂の掘込み事業や講堂のものと推定される立派な礎石が出土している（奈文研1996a）。この年、カナヅカ古墳の調査が3年計画で開始され、一辺60mの方形壇にのる横穴式石室と判明した（明日香村1997a）。

平成8年度（1996）は飛鳥京跡エビノコ郭の西南隅と大殿の西北柱穴を確認した（檀考研1997a）。また、酒船石遺跡の西側水田で石敷と宮東辺の基幹水路（南北石組溝）を検出し（明日香村1998a）、翌年には大型建物を検出している（明日香村1999b）。一方、水落遺跡の南東部でも四面庇の大型建物が検出され、漏刻台建設以前の当地域の利用状況を推定する材料となっている（奈文研1997a）。島庄遺跡では方形池の堤の一部を検出している（檀考研1997a）。

この年、奈良県が計画した万葉文化館建設に伴う事前調査が飛鳥池遺跡で始まった。まずは遺跡の管理区域に相当する場所から始まり、飛鳥寺の寺域が五角形をしていたことが判明した(奈文研1997a)。飛鳥寺跡では西門とその西側の一画が公園整備にともなって調査された。その結果、西門の北西隅と南北方向の石組溝・堀・土管暗渠を検出している(奈文研1997a)。また、寺院調査で最も注目されたのは吉備池廃寺である。吉備池はこれまで、瓦窯と推定されていたが、南側堤に巨大な金堂を確認したことを受けて、以降継続的に調査が実施された。建物の大きさや伽藍規模、年代からみて百濟大寺の有力な候補地となった(奈文研1997a)。さらに、この年、川原下ノ茶屋遺跡では道路交差点を検出、川原寺・橋寺間の東西道路が、幅12mで一直線に伸びることが判明した(明日香村1998a)。一方、藤原京でも橿原市土橋遺跡と桜井市上之庄遺跡で西・東十坊大路を検出し、それぞれ京極大路であることが判明し、藤原京域論に新たな成果をもたらした(橿原市千塚資料館1997・桜井市文化財協会1997)。細川谷古墳群では横穴式石室を3基確認している。

平成9年度(1997)には飛鳥京跡エビノコ郭の北辺を検出、南北55mの規模と判明した(橿考研1998a)。前年度から始まった万葉文化館建設に伴う調査で、飛鳥時代最大の総合工房であることが判明しつつあると共に、「天皇」をはじめとする大量の木簡が出土している(奈文研1998a)。奈良国立文化財研究所の調査は飛鳥池を主要な調査とする。これに伴って、それまで奈良国立文化財研究所が行っていた公共下水道に伴う調査を明日香村が担当することになり、雷丘東方遺跡や水落遺跡、飛鳥寺・川原寺の調査が増大する。また、吉備池廃寺では、前年度の金堂に続き、巨大な塔基壇を検出する(奈文研1998a)。豊浦寺では隣接する甘檜坐神社境内から回廊とも推定される基壇を確認。さらに下層では瓦を伴わない石組み溝を検出している(橿考研1998a)。明日香村に隣接する橿原市五条野町では大規模な区画整理事業がはじまり、五条野向イ遺跡が調査された。コ字形建物配置をとり、皇子級の邸宅とも推定されており、飛鳥地域の宅地利用の実態をはじめて明らかにした(橿原市千塚資料館1999)。この年最も注目を集めたのは15年ぶりに再開されたキトラ古墳の調査である。まずは範囲確認調査として墳丘周辺部分を調査した。その結果、墳丘構築を解明すると共に、直径約14mの二段築成の円墳であることが判明した。つづいて小型カメラを用いた内部探査では、玄武の他に青龍・白虎や天文図を確認した(キトラ古墳学術調査団1999)。また、梅山古墳では護岸工事に伴って、墳丘裾から貼石(斜めの石敷)が検出された(宮内庁1999)。

平成10年度(1998)も奈良国立文化財研究所の飛鳥池遺跡の調査が継続している。遺跡からは富本銭が出土しており、その年代と鑄造実態が注目された(奈文研1999a)。飛鳥京跡では東面大垣の東側で犬養万葉記念館建設の事前調査で、6個の土坑から漆壺が400個体出土し、当時の漆の保管・流通センターの状況が判明した(明日香村2000)。酒船石遺跡では万葉文化館に関連する村道調査として遺跡の東側の丘陵上で大規模な掘立柱堀が見つかった(明日香村2000)。その性格は明らかには出来ていないが、翌年度には八釣・東山古墳群でも同様の堀が見られた(明日香村2001)。酒船石遺跡と関連して同じ斉明紀に記載のある狂心渠と推定される幅10mの運河が飛鳥寺東面大垣と飛鳥坐神社の間で検出された。過去の調査地を再検討した結果、酒船石遺跡東側から、奥山久米寺西方を経て香具山西側の中ノ川に接続する経路が復原できる(明日香村2000)。また、この運河の東側の東山カワバリ遺跡では飛鳥寺創建時の鴟尾をはじめ大量の瓦が出土しており、飛鳥寺の関連施設があった可能性が高い(明日香村2000)。寺院関連では下水道管埋設に伴って、橋寺・飛鳥寺・豊浦寺・坂田寺が調査されており、特に、

豊浦寺跡では金堂の南北規模が確定し（明日香村2000）、坂田寺跡では回廊内に2基の基壇建物があったことが判明した（明日香村2000）。また、この年飛鳥坐神社の本殿拝殿の建替えに伴って境内地を調査した。残念ながら江戸時代の造営で、それ以前の社寺については明らかにできなかったが、江戸期の神社を解明している（明日香村2000）。古墳関係では細川谷古墳群の上5号墳が調査され、馬具ミニチュアカマドが出土している（榎考研2003）。また、宮内庁吉備姫王墓にある猿石の保存処理に伴って、発掘と石造物の調査が、榎原考古学研究所と宮内庁で実施され、猿石にホゾがあるものがあることが判明、一部には表面に朱が残されていることがわかった（宮内庁2000）。

平成11年度（1999）、大正5年に出水酒船石が出土した飛鳥京跡苑池では前年度から継続していた調査で、広大な苑池と石造物を検出した（榎考研2002）。また、奈良国立文化財研究所の飛鳥池遺跡の調査が終盤をむかえてきた。ここに至って、飛鳥池遺跡で700年よりも以前に富本銭が鑄造されていたことが判明し、益々その重要性が高まった（奈文研2000）。万葉文化館関連の道路建設に伴う調査で、酒船石遺跡北側の谷では亀形石槽を含む導水施設や石敷・石段が出土、予想を超える方向へと動きつつある（明日香村2001）。20世紀最後の大発見と称された。また、藤原宮では中枢部の計画調査が開始され、まず朝堂院北東隅を確認すると共に、下層で先行・先々行条坊を検出し、藤原宮造営の一端を表している（奈文研2000）。一方、八釣・東山古墳群ではほ場整備に伴って、6世紀中頃から7世紀前半にかけての古墳が7基みつき、副葬品に馬具等も含まれていた（明日香村2001）。榎原市五条野町では平成9年度に続き、五条野内垣内遺跡が調査され、皇子級の邸宅と評価されている（榎原市千塚資料館2001）。

平成12年度（2000）には飛鳥池遺跡の調査は最終年度を迎えており、駐車地域域の調査を行い、酒船石遺跡との間を解明しようとした。しかし、ここでは炉跡などは出土するものの石敷等酒船石遺跡に直接関わる遺構は確認できていない（奈文研2001）。一方、酒船石遺跡では亀形石槽の北方を調査し、当地域が7世紀中頃から9世紀末に至るまで、5時期の変遷があることが判明した（明日香村2002）。飛鳥池遺跡の調査が終了するのを受けて、奈良国立文化財研究所では石神遺跡の計画調査を再開した。ここで遺跡の北限とみられる大垣を確認している（奈文研2001）。藤原宮では朝堂院地域の朝堂東第1堂を調査した（奈文研2001）。吉備池廃寺では金堂の南側で中門を検出したが、規模は小さい（奈文研2001）。飛鳥寺跡では下水道管理設にかかわって回廊部分を調査している（明日香村2002）。キトラ古墳では前回のカメラ精度では漆喰壁の状態が明らかにはできなかったことを受けて、今回はデジタルカメラによる内部探査を実施、新たに南壁で朱雀を確認した。21世紀最初の大発見である（明日香村2002）。藤原京左京十二条五坊では弥生土器が出土し、飛鳥以前の様子についての一端を垣間見ることができた（明日香村2002）。また、植山古墳では一墳丘二石室の方墳であることが明らかとなり、竹田皇子と推古天皇の改葬前の古墳の可能性が指摘された（榎原市2001）。

小結

この10年間の発掘成果を概観すると、以前の10年にもまして重要な成果が上がっている。特に、後半期においてはキトラ古墳・飛鳥京跡苑池・吉備池廃寺・飛鳥池遺跡・大藤原京関係が注目された。さらに2000年には酒船石遺跡で亀形石槽が出土するなど、その調査はピークに達したといっても過言ではない。キトラ古墳壁画では東アジア最古の天文図が明らかとなり、飛鳥京跡では広大な苑池に石造物が、吉備池廃寺ではこれまでまったく未確認であった地に巨大

な伽藍をもつ百濟大寺が、飛鳥池遺跡では各種貴金属の生産に止まらず、最古の鑄造貨幣である富本銭をも鑄造していた。藤原京ではこれまでの大藤原京の京域外で条坊道路が確認されるなど、これまで予想だにできなかった発見があいついだ。これらの調査成果は古代飛鳥像を大きく塗り替えるもので、この成果に伴って、次章以降で記すように多くの研究が進んだ。

Ⅲ. 遺跡研究

宮都論

この時期、飛鳥を中心とした宮都研究では伝承飛鳥板蓋宮跡の研究が大きく進んだ。伝承飛鳥板蓋宮跡は1959年から橿原考古学研究所によって発掘調査が継続されており、そのデータは膨大なものになる。その調査成果の蓄積を整理し文献史料と照合したのは小澤毅である。小澤は1988年に「伝承飛鳥板蓋宮跡の発掘と飛鳥の諸宮」の中で、当宮跡には大きくⅠ～Ⅲ期の3時期に重なる宮殿遺構があり、さらにⅢ期は2小期に区分できるとする。これらの遺構の変遷過程と史料を対比し、Ⅰ期を飛鳥岡本宮、Ⅱ期を飛鳥板蓋宮、ⅢA期を後飛鳥岡本宮、ⅢB期を飛鳥浄御原宮に比定し、ほぼ同じ位置に「飛鳥宮」が継続して造営されたとする(小澤1988)。さらに、伝飛鳥板蓋宮跡の遺構を建築的に復元し、史料との対比によって各殿舎名の比定も行った(小澤1997a)。これ以前に上層遺構(Ⅲ期)を飛鳥浄御原宮に比定する見解は菅谷文則・亀田博らによってだされていたが(菅谷1983・亀田1984・1987)、小澤はより精密に宮名比定を行った。この成果は林部均によってさらに補強されていく。林部は伝飛鳥板蓋宮跡の遺構区分と、そこから出土する造営・廃絶時の土器の年代観から小澤の説を補強した(林部1998a)。これによって伝飛鳥板蓋宮跡の遺跡は、遺構・遺物・史料の上から、上記の宮名比定がなされたことになる。林部の研究は橿原考古学研究所附属博物館における伝承飛鳥板蓋宮跡の復元模型作製を担当したことに始まる(橿研博物館1997)。この中で過去の調査成果を再検討すると共に、宮都研究の中での飛鳥浄御原宮の位置づけを行っている。特に、1998年に続けてだされた一連の論文では上記の宮名比定を受けて、宮都の変遷過程の中で大極殿・朝堂院の成立についての位置づけを検討しており、さらに藤原宮への展開をみる(林部1998b・1998c・1998d)。従来、宮名比定に主眼が置かれた研究が多い中、さらに踏み込んだ研究として注目される。また、宮都廃絶後の跡地利用については、しばらくの間は整地され別途利用されることはなく、還都予定がなくなったことが確認された後に再利用されるとする(林部1999a)。

伝承飛鳥板蓋宮跡の宮内ならびに周辺の官衙施設については亀田博が検討をしている(亀田1997a)。この中で内郭北方の宮内には苑池や膳職にかかわる施設が、東方には史書編纂にかかわる施設、飛鳥寺の北西に漏刻を管理する陰陽寮があるとし、天皇の生活にかかわる役所が宮内にあるとする。伝承飛鳥板蓋宮跡だけでなく、小墾田宮と嶋宮が飛鳥宮を補完する宮殿であり、あわせて宮都空間を構成するとしたのは小澤である(小澤1995)。また、水落・石神遺跡を含む飛鳥寺西方地域の研究も多い。水落遺跡に関しては調査の正式報告書が1995年に刊行された。そこでは調査の詳細について記すと同時に遺構の時期・性格・構造を解明、史料にみる水時計や中国の類例と比較して、この遺構を漏刻と特定した(奈文研1995a)。これによって水落遺跡が漏刻を主体とする遺跡であることが確定したと言ってよい。さらには漏刻制や陰陽寮についても整理している(今泉1993a)。一方、石神遺跡は飛鳥寺西の記事にかかわって、斉明朝の迎賓館と推定されているが、これを須弥山石や漏刻・斎樹と関連して聖なるものとして思想的な繋がりによって結ばれた地域であるとする(今泉1992)。さらに、東北地方の郡山遺跡

の遺構や蝦夷関係の史料から、そこに密接な関係があるとみたのは熊谷公男である(熊谷1997)。また木下正史も儀礼空間としての意義を提起している(木下1997a)。

酒船石の研究は1992年度にその丘陵中腹で石垣が発見されたことによって新たな段階に入った。その後の調査でも酒船石の丘陵に石垣が幾重にも巡ることが確認されており、『日本書紀』の斉明紀「宮の東の山の石垣」に該当する遺跡として注目を集めた。この成果を受けて、河上邦彦は遺構の形態が神籠石・古代山城と類似することと、史料との対比から斉明天皇が多武峰に築いた壮大な山城と推定した(河上1994)。さらに韓国の山城との構造的類似点を指摘したのは亀田修一である(亀田修1995)。一方、門脇禎二も酒船石遺跡を両槻宮と理解している(門脇1996)。これに対して、酒船石遺跡は「宮東山の石垣」で、両槻宮は多武峰にあるとみたのは関西大学地理学教室や亀田博である(関西大学1995・亀田1998a)。また、石垣の倒壊については地震の可能性が指摘されていたが、相原嘉之は飛鳥時代の地震史料を整理し、石垣の倒壊時期を天武13年の白鳳南海地震とみた(相原1995a)。これらの成果に加え、2000年には北側の谷底で亀形石槽を含む導水施設が発見された。この遺構の解釈についてはその後大きな議論を呼ぶことになる(相原2000c、網干2000a、猪熊2000a、岩本2000、千田2000a、辰巳和2000)。

さらに広範囲に飛鳥全体の都市空間について、検討を加えたのは相原である。相原は時間軸と空間軸を基本に、飛鳥の変遷過程を追いながら京の形成過程を考古学的に検討した。7世紀前半からすでに都市的要素がみられたが、7世紀中頃以降急激に都市化が進むとし、7世紀後半の倭京の範囲を岸説藤原京域と飛鳥地域とみ、これが大藤原京へと拡大したとする(相原1993a)。同様の手法によって飛鳥の都市の成立を検討したのは阿部義平で、ほぼ同じ分布の変遷を追認している(阿部1997)。湊哲夫は斉明・天智の倭京と天武の京を個別のものと考えて、後者は条坊制都城とする(湊1997)。

個別のテーマでは木下が飛鳥における邸宅の分布と立地について、文献史料と発掘成果から検討している(木下1994)。この中で飛鳥地域においては平坦部は宮殿・寺院で占められており、邸宅などの宅地は周辺の丘陵部・山間部に配されていたとする。相原は飛鳥地域の掘立柱建物の規模を統計的に算出して、藤原京の宅地と比較することによってこの地域性をみた(相原2000a)。さらに道路網についても検討し、飛鳥地域における道路網を復元すると共に、その特性を導き出した(相原1998a・1999a)。これらの点を含めて飛鳥の都市性を検討したのは山本忠尚である(山本1998)。山本は道路や広場・市・運河・方位などや土器・貨幣・呪術など、様々な項目について、発掘された遺構・遺物から検討をしており、斉明朝以降整備はされていくが、都市としての完成は藤原京を待たなければならないと結論づけた。また木下は飛鳥にみられる石組暗渠や銅管などを水を利用する上水道を検討している(木下1995)。これに対して黒崎直は藤原宮の井戸について整理を試みている(黒崎1995a)。

これら飛鳥の都を東アジア的視点で比較検討したのは亀田博である。亀田は当時の国際交流を踏まえて、高句麗・新羅・百済の都市を検討しているが(亀田2000a)、扶余との比較において類似点・相違点を抽出している(亀田1995a)。

都城論

当該年間における都城制、つまり藤原京の研究については、京域の範囲についての京域論が主流を占める。従来、藤原京の範囲については、1969年に藤原宮の範囲を確定したことを受けて、岸俊男が復元した十二条八坊の範囲(以下、岸説藤原京と呼ぶ)、つまり古道である下ツ道、

中ツ道、横大路、山田道に囲まれた範囲が推定されていた(岸1969)。その後の京域の調査においても、その想定位置に正しく条坊道路が検出され、この復元案は定説として認知されるに至った。しかし、1979年に岸説藤原京の北側にあたる下明寺遺跡と、北西側にあたる院上遺跡で、岸説条坊の延長上に正しく載る道路遺構を検出し、藤原京の京域に再検討を促す結果となった。当時この成果を積極的に評価し、京域案を提示したのは秋山日出雄の大藤原京説である。その後、岸説藤原京域の外でみつかる条坊道路についての大藤原京説は数人の研究者において提示され、その範囲はおおよそ岸説でいう十八条八坊分である。これらの大藤原京説も、岸説藤原京とその外に広がる外城とする説(秋山1981)、当初岸説の京域から大藤原京に広がったとする拡大説(林部1993a・相原1994)、逆に大藤原京域から岸説藤原京に小さくなったとする縮小説(楠本1983・仁藤1992)、当初から大藤原京域であったとする説(阿部1986・押部1988)など様々である。しかし、これら多くの説は岸説を基本としており、これに外京を想定したり、岸説を拡張、あるいは岸説に縮小するなどである。1996年度にこれら各大藤原京説のさらに外側にあたる橿原市土橋遺跡(西十坊大路相当)、桜井市上之庄遺跡(東十坊大路相当)が調査され、これまでのいずれの説も再考が余儀なくされた。これらの成果を受けて小澤毅と中村太一は藤原宮を中心におく、十条十坊(一坊は岸説の4倍の16坪)の正方形の京域を復元した(小澤1997b・1998a、中村1996・1999)。この設計には中国の周礼考工記に記される理念を反映しており、坊令数も整合するという。しかし古代史上最大の規模をほこる藤原京も、わずか16年後には平城京へと遷る。この契機には702年に派遣された遣唐使の影響が大きいとする。竹田政敬は東西北は小澤・中村説と同じだが、南限については十二条大路が山田道であり、南京極であるとする(竹田1997・橿原市千塚資料館1998)。これらの諸説は大脇1998aに要領よくまとめられているが、理念上の条坊範囲と実際施行された条坊範囲は異なることも指摘している。特に南京極大路と香具山一帯については、条坊施行がなされず、竹田も香具山一帯の条坊未施行地域が平城京外京へ反映しているとみる(竹田2000a)。これらに対して十条十坊説が最も有力な仮説であると認めながらも、さらに外側、特に東側については上ツ道まで広がる可能性を黒崎直は示唆した(黒崎1997a)。施行京域復元の基本は検出された条坊道路とその規格、さらに宅地遺構などの検討であるが、この他の視点としては、当時の官人の人数を史料から検索し、宅地班給記事との関連で、岸説藤原京では収容仕切れないことを指摘した大脇の研究がある(大脇1998a)。また藤原京の宅地については、従来宅地班給によって推定されていた宅地規模が、四町宅地から1/16町宅地までであることが発掘の成果からわかってきた(竹田1998)。さらに、陵墓や京戸の関係から京域に踏み込んだ研究や(今尾1999・2000a)、神社との関係にも言及した研究もある(和田1999a)。

奈良国立文化財研究所では1991年から藤原宮跡発掘調査部内で大藤原京研究会を立ち上げ、これまでの基本資料の整理や課題の抽出を行っている。この研究会の成果の一部は、後に研究論集としてまとめられている。ここではこれまでの研究や課題点を明確にした研究(黒崎2000)や、文献史料から藤原京の名称や造営経緯について検討した研究(橋本2000)、瓦からみた京内廿四寺の検討(花谷2000a)や、藤原京・大藤原京内の条坊道路の側溝から出土した土器の器種や年代を検討した研究(川越2000)がある。さらに研究会は1998年度より拡大して開催され、条坊データ・文献目録も作成している(奈文研1999b)。また、この時期古代都城制研究集会在1996年から3ケ年にわたって行われ、飛鳥から平安京までの都城研究の現状が報告されている(奈文研1996b・1997b・1998c)。

苑池論

飛鳥地域の苑池研究は1970年の古宮遺跡の小池の発掘にはじまる。その後1972年には鳥庄遺跡で一辺40mを超える方形池を検出、坂田寺跡や雷丘東方遺跡でも方形池の一部とみられる遺構が検出されている。さらに1987年には鳥庄遺跡で人工の河川と小池が発見によって進化してきた。このような飛鳥地域で発掘庭園が進む中、飛鳥の池は方形をしているという認識が確立していった。当該時期においても飛鳥池遺跡で方形池が検出されたが、これは工房の沈殿池としての機能があり、方形池を苑池の池とみることに再検討を余儀なくされた。本中眞は奈良・平安時代の庭園景観を検討する中で、飛鳥時代の庭園についても検討しており、飛鳥時代には庭園は外側の自然景観との対応はそれほど意識されていないとする(本中1994)。高瀬要一は、飛鳥・奈良時代の苑池遺構を整理する中で、飛鳥時代の方形池に関しては3種に区分する案を提示している(高瀬1998)。また清水眞一は上之宮遺跡の苑池遺構を中心に、懸樋で水を引っ張って落とす池を系統立てて検討している(清水1999)。そして奈良国立文化財研究所では我が国で発見された発掘庭園遺構のデータ整理の一環で集成している(奈文研1998b)。

このような中、1999年には飛鳥京跡苑池遺構が発見された。ここは大正年間に「出水酒船石」が出土した場所で、新たに二つの石造物が原位置で出土し、広大な苑池が確認された。この苑池の系譜はそれまでの方形池とは異なり、大陸風の池という位置づけがなされている(榎考研1999a・河上1999a)。上野誠はこの苑池遺構を万葉集の歌から読みとろうと試みている(上野2000a)。

寺院論

当該年間について、吉備池廃寺・本薬師寺跡・豊浦寺跡の発掘調査で、特に大きな成果があった。各調査の成果を受けて、この時期の寺院研究が大きく進んでいる。

吉備池廃寺の発見前に塚口義信は、『大安寺伽藍縁起并流記資材帳』の焼失記事から百済大寺について検討を加えていた(塚口1992)。また、大脇潔は吉備寺はなかったとし、吉備池の瓦散布地は百済大寺の瓦窯と推定、百済大寺の有力な候補地として木之本廃寺をあげている(大脇1995a)。しかし1997年に吉備池廃寺が発見され、その破格の規模や年代などから奈良国立文化財研究所では百済大寺の最有力候補とした。この調査担当者であった小澤毅は調査成果や史料をもとに吉備池廃寺=百済大寺説を積極的に打ち出している(小澤1997c)。その後、調査は塔・回廊・中門・僧坊に及び、吉備池廃寺が百済大寺であったとする説は益々真実味を帯びていくことになった。これらの成果を受けて帝塚山大学では「吉備池廃寺をめぐる」と題するシンポジウムを開催、吉備池廃寺が百済大寺であることを大筋では認め得るものの、課題点のいくつかも指摘された(近江1998a)。

本薬師寺跡については、平城薬師寺への移建の問題、寺院の創建時期、藤原京条坊との関係など課題は多い。これらの課題を解明するために1991年度より確認調査がはじまった。まずは金堂から遺構の残存状態を確認し、塔・中門へと調査の範囲が広がっていく。調査成果は多岐にわたるが、条坊道路との関係では従来、寺城南西隅で得ていた薬師寺の造営が古く、条坊道路の施行が新しいという所見とは異なり、中門の下層から条坊道路が確認された。さらに道路側溝に沿って塀や建物の柱穴も確認でき、道路施行後の一定期間にわたって同坪内が宅地と化していたことが判明した。このことは、条坊道路を施行しこれに伴う宅地が先行し、これらを廃して本薬師寺が建立されたことを意味しており、藤原京の条坊施行は記録に残る本薬師寺建

立よりも古い、天武5年の新城に求められることになった(小澤1999a)。また、調査で出土した瓦を詳細に分析して、各堂塔の建立時期と順番を提示したのは花谷浩である。花谷は金堂・東塔の瓦を分析し、さらに年輪年代との整合性を踏まえて検討して、金堂→講堂→回廊・中門・東塔→西塔と推定した(花谷1995a・1997a)。

豊浦寺跡ではすでに講堂とその下層の掘立柱建物(豊浦宮?)、金堂の一部が確認されていたが、1994・1998年度には金堂を面的に調査しその規模を確定した。また、1997年度にはその西方では回廊とも考えられる遺構を検出している。これらの成果から豊浦寺の伽藍配置について再検討を加えた花谷は、塔跡を金堂のすぐ南におく四天王寺式の伽藍と推定した(花谷2000b)。

この他に寺院関係の研究として朝風廃寺や青木廃寺の整理を行い、これまで不明確であった寺院の紹介・再検討を行っている(大脇1993a・1993b)。また、飛鳥寺東南禅院の所在地について平城京との関係から、飛鳥寺寺域の東南部一画が東南禅院の有力な候補地であるとし(花谷1999a)、これは後に飛鳥池瓦窯の成果にも反映されている。

奥山久米寺跡については長らく逸名寺院であったが、小澤はここを小壘田地域とみなし、小壘田寺と推定した(小澤1995)。これに賛意を表したのは大脇で、過去に奥山久米寺より出土していた墨書土器を「少治田寺」と読めるとし、造営氏族を小壘田臣が有力とする(大脇1997)。これに対して、小笠原好彦は奥山久米寺跡出土の同範軒瓦の検討から小壘田臣の寺院とするよりも、境部臣摩理勢の可能性を提示し、山田道沿いに蘇我氏の寺々が計画的に配置されていたとした(小笠原1999)。飛鳥地域の蘇我氏の寺々については大脇1997でも検討されており、古道に沿って蘇我氏の邸宅・寺院が配置されていたことを指摘している。

また、古代寺院の移建と再建についてのシンポジウムが帝塚山大学で行われた(帝塚山考古学研究所1995)。この中では史料や瓦の研究成果から、百濟大寺→大官大寺(大脇1995b)、大官大寺→大安寺(中井1995)、厩坂寺→興福寺(亀田1995b)、田中廃寺→平松廃寺(竹田1995)の移建が検討された。

これらの個々の成果を総合的に捉えた研究がある。大脇は1991年に京内廿四寺の比定にあたって本薬師寺創建瓦よりも古い瓦を抽出した(大脇1991a)。廿四寺の比定についてはこれまでも岸俊男や秋山日出雄によって試みられていたが、具体的に瓦の年代観から検討したはじめての研究である。花谷も大脇と同様の手法によって廿四寺を推定している(花谷2000a)。しかし、その10年の間に寺院跡の調査が進んだことと、各寺院の瓦について資料を提示した手法は、説得力があり、飛鳥地域の寺院瓦資料としても貴重である。また、飛鳥池遺跡出土の寺名木簡に記された寺院名について、瓦と史料を駆使することによって、その寺院の比定を試みた研究もある(伊藤・竹内2000)。

工房論

1991年度に飛鳥寺の南東にある近世ため池の埋め立てに伴う調査が実施された。飛鳥池遺跡の発見である。この調査で谷底に飛鳥時代の銅・鉄・ガラス・漆工房が判明した。しかし、この工房遺跡の重要性が解明されるのは1996年度から始まった万葉文化館(万葉ミュージアム)の建設に伴う発掘調査である。銅・鉄・ガラス・漆工房に加えて、ここでは金・銀・玉・瓦、さらに富本銭を生産していたハイテク総合工房であることが判明し、大量の木簡群も出土している。これらの工房廃棄物を谷筋で沈殿させ排水する構造もみられる。さらに近世飛鳥寺の梵

鐘鑄造や古墳時代の遺構・遺物も出土し、複合遺跡であることも判明した。

これら出土遺物のもつ個々の研究については別に記すとして、ここでは工房遺跡の研究について概観しておきたい。飛鳥池工房の調査と成果については年報等によってその概要は報告されているが、総合的にまとめたのは花谷浩である。花谷は遺跡から出土する遺物群を地区ごとに分析し、各製品の製作地区を特定している。さらに様^{ためし}による注文生産の受注システムを確認し、工房と管理区域の生産体制を復元している。さらに出土木簡や富本銭の分析から官が関与する工房であると同時に飛鳥寺とも深い関わりがある。これらの生産システムは古墳時代から、後の律令制の生産システムへの移行期として評価できると推定した(花谷1999b)。また、出土木簡から飛鳥池工房の性格について言及したのは、寺崎保広と吉川真司である。寺崎は当遺跡から出土した木簡群には工房にかかわるものが主体を占め、他に宮廷祭祀にかかわるもの、寺院にかかわるものがあることを確認している。こうした木簡の分析と遺構の概要から、飛鳥池工房は宮廷が管理した工房と位置づけている(寺崎1999a)。これに対して吉川は飛鳥寺にかかわる工房とみる(吉川2001)。この遺跡は生産品目の多様性もさることながら、その生産工程や運営システムまでを復元し得る点で重要であり、それは律令制成立過程の生産システムとして注目できる。

古墳論

この時期の古墳研究では見瀬丸山古墳、キトラ古墳、そして植山古墳の調査の進展において、著しく進んだ。

この時期の見瀬丸山古墳に関する研究は、増田一裕の研究から始まる(増田1991)。増田は文献史料から見瀬丸山古墳の石室や家形石棺の数値・形態を復元し、檜隈大陵と檜隈陵を別のものとし、梅山古墳を改葬前の堅塩媛墓とし、丸山古墳を欽明天皇と堅塩媛の陵とみた。しかし、1991年度に宮内庁陵墓参考地である見瀬丸山古墳の石室内写真が偶然一般人によって写真撮影されたことによって、大きな進展をみせる。それまで古記録からしかわからなかった石室(堀田1992)の一端が判明した。そこには長大な石室に泥が溜まっており、二つの石棺が置かれていた。その経緯は吉田1992に詳しい。天皇陵に匹敵する石室の実態と奥の石棺の方が手前の石棺よりも形式的に新しい事実も判明した(和田1992)。さらにこの報道を受けて、宮内庁は石室内の実測調査を実施、その成果を公表すると共に、一部研究者に石室を公開した(宮内庁1994)。これらの成果を受けて、各分野からの研究が進み、見瀬丸山古墳=欽明天皇陵という説が有力となる。しかし、宮内庁現欽明天皇陵(梅山古墳)の護岸改修に伴う発掘調査(宮内庁1999)で、墳丘裾に敷石が見つかり、『日本書紀』の推古紀28年の「砂礫を檜隈陵の上にふき」と符合する成果と評価された。さらに見瀬丸山古墳が欽明陵である説に対して、和田萃は問題点を整理している。そこでは梅山古墳欽明陵説の根拠として墳丘に砂礫で覆われていること、すぐ南の小字池田で柱根が出土していること、梅山古墳の東にカナヅカ古墳があること、欽明陵の真弓の地名が梅山古墳・天武持統陵あたりまで広がることをあげ、これらの事実が記録にある「砂礫を檜隈陵の上に葺く」「大柱を土の山の上にたてる」「吉備姫王墓の墓を檜隈陵域内とする」などの記載と一致することを指摘し、対して見瀬丸山古墳には葺石がみられず、陵域内に古墳がないことを指摘した(和田1996a)。欽明天皇陵の比定に関しては、見瀬丸山古墳では石室の状況が判明してきたが、墳丘については調査されておらず、梅山古墳は墳丘の一部が解明されたが、石室が不明であるなど、両古墳が同一条件で検証できていないという

課題が残る。なお、カナヅカ古墳については1995年度から3年間にわたる調査がなされており、一辺60mの方形壇にのる35mの古墳が復元され、吉備姫王墓の有力な候補地とみられている(西光2000a)。その後、見瀬丸山古墳の東にある植山古墳において一墳二石室の方墳が確認され、推古天皇と竹田皇子の前陵の可能性が指摘されている(檀原市2001)。

一方、終末期古墳の研究では15年ぶりに調査されたキトラ古墳が注目を集めた。1997年度に墳丘周辺部の調査を施し、直径14mの二段築成の円墳であることがわかり、1983年から15年ぶりになる1998年には小型カメラによる内部探査で青龍・白虎・天文図を確認した。一連の調査においては、多くの研究者から阿部御主人説(直木1998・1999)、百済王説(千田1998・1999)、東漢氏説(和田1999b)など被葬者論が展開されたが、古墳の細かな年代や身分など、不確定要素が多い。一方、高松塚古墳の被葬者論については、古代学研究会のシンポジウムが1997年に開催され、忍壁親王・弓削皇子・葛野王・石上麻呂・高句麗王族などが候補としてあげられており、発見から25年を経ても、その築造年代は20~30年の差がみられる(古代学研究会1998)。このような中、相原嘉之はキトラ古墳と同形態の石室をもつ石のカラト古墳・マルコ山古墳・高松塚古墳と石室の天井形態や副葬品を比較して、キトラ→カラト→マルコ→高松塚の順に作られたと推定し、いずれも飛鳥時代の古墳と推定した(相原1999b)。同様の視点は白石太一郎によっても検討され、同じ築造順序にたどり着くが、石のカラト古墳以降を奈良時代の古墳と想定している(白石2000)。また、1984年に調査された東明神古墳の調査報告である『東明神古墳の研究』が刊行され、河上邦彦の多くの関連論考が再録されている(河上1999b)。

この他に終末期古墳の研究には、古墳築造の立地について検討したのは網干善教で(網干1999a)、これが中国の風水思想が反映されていることを積極的に提唱した河上邦彦の検討がある(河上1997a)。また、前園実知雄は古墳の分布状況を中国の陵墓と比較した(前園1999)。一方、大和・河内における横口式石槨の分類・編年を試みたのは林部均で(林部1998e・1998f)、さらに全国規模で試みたのは広瀬和雄である(広瀬1995)。大化の薄葬令の記載と横口式石槨を対比させたのは塚口義信である。すでに網干善教が同様の視点で鬼の俎雪隠古墳が令の規定に合うことを指摘していたが、塚口はより詳細に検証し、多くの古墳が令の規定に合うことを指摘すると同時に、令規定を超える天武持統陵や東明神古墳などは、超法規的立場の人物(天皇・皇太子など)の墳墓とする(塚口1994・1995)。この時期の飛鳥地域の古墳研究の集大成として網干1999a・猪熊1994・河上1995aがある。

古墳壁画に関しては、キトラ古墳の探査で四神壁画と共に天文図が注目された。高松塚古墳は発見から20年を経た1992年、飛鳥資料館で特別展「高松塚壁画の新研究」が開催された(飛鳥資料館1992a)。そこで、人物壁画について左右の壁画が共通する部分があり、下絵の存在や型紙によって描かれていることが指摘された。同様に青龍と白虎についても反転させると一致する部分が多いとする。また、今尾文昭は高句麗・中国の四神壁画と比較し、高松塚の四神は静止状態を示し、その発想自体は中国だけでなく高句麗の影響が強いとする(今尾1992)。佐原真は装飾古墳と高松塚古墳の壁画を比較し、正面性・平面並列型の前者と斜め向きの重層型の遠近感のある後者があることを指摘し、後者は漢代の大陸文化の影響と説く(佐原1993)。

キトラ古墳の探査で四神壁画と共に天文図が注目された(キトラ古墳学術調査団1999)。これらの成果を受けて、壁画の中でも天井の天文図は東アジア最古に属する本格的な天文図であることがわかり、宮島一彦は星座の同定やその原図が北緯39度あたりで作成・修正された可能性があることを突き止めた。つまり高句麗の星空である(宮島1998)。これに対しては橋本敬

造はその同定に対して批判する（橋本1998）が、星座の同定に関しては宮島の方が正しい。

飛鳥前史

飛鳥地域における飛鳥時代以前の遺跡の研究はあまり多くない。1987年に岡崎晋明が執筆したものが最もまとまっている（岡崎1987）。しかし、発掘調査では飛鳥時代の遺構・遺物に混じって少なからず、前史の遺物が出土している。これらを丹念に集成することによって飛鳥前史がおぼろげながら見えてこよう。

これまで縄文時代草創期とされる有舌尖頭器が桧前脇田遺跡から1点だけ出土していた（明日香村1988b）。しかし、当該年間において飛鳥池遺跡で2点のサヌカイト製の石器が出土している。ひとつは木葉形尖頭器と有舌尖頭器で、いずれも縄文時代草創期と推定されている。この出土によって近辺にこの時期の遺跡が予想される（水戸部・松村1999）。一方、松田真一は大和全域における縄文遺跡の集成を行い、その立地と分布について検討を行った（松田1997）。さらに1996年度には藤原京左京八条三坊と坂田寺跡で縄文土器が出土した（明日香村1998a）。これらは飛鳥川右岸に位置しており、縄文遺跡の分布が飛鳥川流域に集中しており、平野部に至ると、その両岸に展開する。これは飛鳥の立地が飛鳥川の左岸に平坦部が少ないことに由来するが、坂田寺跡での発見は鳥庄遺跡と稲淵ムカンダ遺跡の間を繋ぐものと評価できる（明日香村1998a）。

一方、弥生時代の遺跡は『大和の弥生遺跡 基礎資料Ⅰ』に集成されている（大和弥生文化の会1995）。ここでは8遺跡が集成されており、いずれも飛鳥川に沿う地域で先の縄文時代の遺跡範囲と重なるエリアである。これらは明確な遺構に伴って出土したものは少ないが、山田道遺跡ではV字形溝や、鳥庄遺跡では竪穴住居が見つかっている。このような中、御園アライ遺跡において土坑や土器埋納遺構から弥生土器が出土しており、今後桧前川流域における弥生遺跡の展開が期待される。

続く古墳時代になると、その集落地域の系統だったまとまった検討がなされていない。

その後の飛鳥

飛鳥時代以降の研究は多くない。まとまったものとしては1998年に飛鳥資料館で開催された「それからの飛鳥」である（飛鳥資料館1998a）。和田萃は近世の本居宣長が菅笠日記に記された旅路を復元し、本居宣長の研究を追認している（和田1993）。また木下正史は藤原宮廃絶後の様相を考古資料から検討した（木下1992）。

IV. 遺物研究

土器論

飛鳥地域の7世紀の土器論については、大きく年代に関するもの、畿内産土師器に関するもの、海外交流に関するものなどがある。

飛鳥地域における7世紀の土器編年は西弘海によって確立された（西1978）。そこでは7世紀の土器を5段階に分け、飛鳥Ⅰ～Ⅳを7世紀の第Ⅰ四半期～第Ⅳ四半期にあて、飛鳥Ⅴを藤原宮期に想定した。その後も基本的にこの編年区分については変更の必要はないが、当該年間においても飛鳥池遺跡（奈文研1992a）・甘樫丘東麓遺跡（奈文研1995b）・雷丘北方遺跡（奈文研1996a）などで基準資料が増加し、特に山田寺下層資料は飛鳥Ⅰの下限が641年頃まで下が

るという年代観の修正を促した(奈文研2002)。このような成果を含め、律令的土器様式について全国規模で検討を加えたのは1992年からはじまった古代の土器研究会主催のシンポジウムである。第1・2回シンポジウムでは安田龍太郎・西口壽生によって飛鳥地域の土師器・須恵器についての編年・様式が整理され提示された(安田1992・西口1993a)。その後研究会では飛鳥・陶邑を含む7世紀の土器編年の再検討が大きなテーマとなった。それは尾野善裕の東海の須恵器編年の再検討に端を発している。尾野は窯から出土する遺物の形式差は窯の使用回数等を検討した上で一括としてあつかって問題がないことを提示した上で、東海の窯式編年を試みた(尾野1997)。同様に陶邑の須恵器窯を再検討した小森俊寛らは、特にTK217窯について検討を行い、飛鳥編年についての矛盾を指摘している(小森1997)。このような検討は大きな波となり、全国的に7世紀の土器編年の再検討が盛んとなった。これらの成果を盛り込んだシンポジウムが1997年に行われたが、相原は資料集で飛鳥・藤原地域の土器について執筆、これまでの飛鳥編年を整理している(相原1997)。飛鳥地域での調査にたずさわる中、現在の飛鳥編年で矛盾はなく、難波編年をめざす佐藤隆も飛鳥編年に問題点を提示していない(佐藤1997)。伝承飛鳥板蓋宮跡の年代を検討した林部均も、一部飛鳥編年に修正を加えるものの現在の編年観に異論はない(檀考研博物館1993)。このことは当遺跡の宮名比定と齟齬がないことから裏付けられる(林部1998a)。また、シンポジウムの成果を受けて、1999年に実施された「飛鳥・白鳳の瓦と土器」において畑中英二が7世紀の土器編年の問題点を再提示する(畑中1999)が、同シンポジウムで花谷浩は史料と瓦の紋様・技法の詳細な検討から瓦の年代観を導き出し、土器編年と矛盾のないことを指摘している(花谷1999c)。また木本元治はこれら一連の7世紀土器編年論争の問題点を整理した(木本1999)。

7・8世紀の畿内を中心として出土する土師器に底部外面を削り、口縁をミガキ、内面に暗文を施すものがある。一般に畿内産土師器と呼ばれている。これらの土器は畿内、特に都を中心として出土しており、地方での出土は少ない。これらを全国規模で出土遺跡・点数・時期について検討を加えたのは林部である。林部は地方での出土時期と量から、その地域と畿内との交流を伺えとし、さらには律令国家の地方支配をも検討できる材料となるとする(林部1992a・1992b・1994)。

これら畿内産土師器とは異なり煮炊具である甕について検討した研究がある。これまでも7～8世紀の甕は調整手法から、旧国単位ごとに分けられるとしていた(小笠原1980)。西口も態勢的にはこれを追認したが、一国に複数の型があったり、同一型が数国に跨る事例があることも指摘している(西口1983)。これは古代の土器研究会でも追認されており、都城の移動とともに都城型ともいべき型に集約されていくことが指摘された(三好1996)。飛鳥・藤原地域では次山淳が整理しており、複数グループによる在地産を主体とし、これに他地域からの搬入品によって構成されるとする(次山1996)。これらを受けて渡邊淳子は当地域の器種構成を時期・地域ごとに検討を加えており、藤原京では遷都と共に都城型が主流を占めるが、京外の飛鳥地域では都城成立以前の小規模単位の在地生産・消費が行われていたことを指摘した(渡邊2000)。

飛鳥出土の土器で海外との交流を物語るものがある。新羅土器である。江浦洋は畿内から出土する新羅土器を集成した(江浦1988)。畿内でも宮都を中心とし、他に官衙あるいは金属工房での出土が多い。これらは国家がある意図をもって持ち込んだ可能性が高く、その器種も長頸壺と硯が多いことから、前者は薬物などの容器として、後者は硯自体を重視してもたらされ

たと推定している（江浦1994）。同様に巽淳一郎は飛鳥地域の陶質土器・鉛釉陶器などの出土状況を検討し、当時の海外交流の一端を伺わしている（巽1998）。さらに5～6世紀の韓式土器の出土状況を検討し、当時の渡来人は未開発の地であった地域に入植させられたことを記した（巽1997）。

瓦埴論

古代瓦の研究は瓦を詳細に観察し、瓦製作技法の変遷と系統関係を明らかにすることにある。これによって瓦の年代、瓦工の単位を把握し、畿内から瓦づくりがどのような経路で波及していったのか。どのような瓦工単位・集団を媒介しているのかを解明することができる。

当該年間以前にすでに、亀田修一は瓦の製作技法が日韓にわたる共通の技法であることを提示し、瓦工人の系譜・系統論が進められた（亀田1982）。さらに菱田哲朗は飛鳥時代初期の瓦を文様と技法の両面から検討した（菱田1986）。これらを1988年段階で体系的にまとめたのは納谷守幸であった。納谷は飛鳥地域の瓦を整理する中で、文様と技法の違いによって花組・星組・雪組と名付け、史料との対比から瓦の製作技法の変遷と系統を明確にし、工人活動の移動や拡散・交流を明らかにしている（納谷2004）。当時未刊ではあったが、この分類と命名は瓦研究者の中に広まり、現在では常識となっている。大脇潔は丸瓦の製作技術について、瓦の詳細な観察と古代から中世、さらに民俗例をも視野にいたした検討をしている（大脇1991b）。一方、山本忠尚は初期の軒平瓦の製作技法や文様について検討し、手彫り・型押しから重弧文・唐草文への変遷を提示している（山本1991）。花谷浩はその後の資料の蓄積を踏まえ、飛鳥地域の寺院・宮殿を瓦の製作技法と展開のなかで、氏寺から官寺造営へ瓦の生産体制が変化し、宮殿が瓦を葺くことのできるようになったのもこのような瓦生産体制の変化があったからとする（花谷1993）。また、土器と瓦の年代観の比較においても、瓦のもつ史料との比較や範キズの変化などの特徴から、極めて説得力に富み、安定した位置を占める（花谷1999c）。李タウンは星組・花組の系譜を韓国の出土例と比較して、星組を指導した瓦工は百濟旧衙里遺跡に瓦を供給した瓦工の一部であり、花組を指導した瓦工は百濟龍井里寺跡に瓦を供給した瓦工の一部とした（李1999）。

これら瓦の研究については、現段階における研究の到達点と課題点を確認する意味で行われたのは1998年からはじまった古代瓦研究会のシンポジウムである。第3回までの成果については『古代瓦研究Ⅰ』にまとめられており、現在の研究の到達点を示している（古代瓦研究会2000）。

文字資料論

この時期の出土遺物としての文字資料には墨書土器、木簡などがある。

飛鳥藤原地域の墨書土器に関しては西口壽生・松村恵司の研究がある。いずれも当地域の墨書土器を概観した記載だが、よくまとまっているので紹介しておく。西口はまず飛鳥地域での最古の墨書土器である坂田寺の「卍」「金」を紹介する。そしてこの地域の墨書を人名（氏族）・場所（宮殿・官司）・寺名・物品名などがあることを指摘し、墨書土器が「小治田宮」や「山田寺」など遺跡の性格を決定・推測させるものがあることを指摘する（西口1993b）。また、松村も西口と同様に飛鳥藤原地域の墨書土器が宮名・官司名・寺名比定に重要な情報をもたらすとす（松村1998a）。これらの墨書土器のうち、雷丘東方遺跡から出土した「小治田宮」墨書土器を再検討した相原嘉之は、墨書土器の帰属が当遺跡にあることを確認し、複数の人物に

よって墨書されたことを突き止めた。これらを踏まえて、雷丘東方遺跡が一貫して小治田宮であることを追認した（相原1999c）。この他に巽淳一郎は石神遺跡出土遺跡出土の刻書土器を集成し検討を加えている（巽2000a・2000b）。

一方、木簡についてはこの時期、飛鳥池遺跡出土木簡が注目あびた。出土量がこれまでの飛鳥地域の調査では最大数の出土であり、その内容も多岐にわたる。これらの内容の総合的な検討によって、飛鳥池遺跡の性格論にかかわる重要な資料となるが、ここではこれらのうちいくつかの木簡についての研究を概観する。

天皇木簡「天皇聚□弘寅□」は極めて大きな問題を抱えており、数人の研究者によっても検討されている（新川2000・上田1998・寺崎1998・1999a・山尾1998）。木簡の文意は不明な文字等があるので明確ではないが、7世紀後半において「天皇」という言葉が使用されていたことが判明した。「天皇」称号が使われ始めた背景には中国の政治思想や理念があったと思われるが、当時現在考えられている天皇称号と同じ意味合いであったかは明らかではない。しかし、同時に出土した次米木簡の新嘗祭と関わって、この頃から天皇という称号が使用された可能性は高い。

次米木簡「丁丑年十二月次米三野国」「丁丑年十二月次米三野国刀支評次米」に関しては、発見後だされた年報によって宮廷祭祀における米の貢進国悠紀・主基の主基に該当するとされた（奈文研1998a・寺崎1999a）。これに対して月次祭神今食スキ米としたのは山尾幸久である（山尾1998）。山尾は木簡が12月と記すが、新嘗祭は11月にすでに終わっており、木簡に月まで記載されているのは疑問とした。これを受けて667年12月の月次祭神今食の「次米」である可能性を指摘した。また、早川万年は山尾の疑問点を受けて、新嘗祭の次米説に難色を示すが、山尾の月次祭神今食スキ米説も神今食にあたり米の貢進の記事が見られない事から、単なる食米とした（早川1999）。これらは今後とも検討され、飛鳥池木簡群の中で検証されなければならないが、飛鳥池遺跡のすぐ南にある酒船石遺跡が巨大な祭祀遺跡であることが判明してきた今、新嘗祭説が有力とみらる。

寺名木簡「輕寺 波若寺 瀆尻寺 日置寺 春日部 矢口 石上寺 立部 山本 平君 龍門 吉野」には12ヶ寺院の名称が記載されている。これらの寺院比定を、瓦と史料を基に推定し、この木簡が飛鳥寺東南禅院に存在した經典の配付リストだったと推定した（伊藤・竹内2000）。比定された寺院については、寺院遺構が明確ではない寺院も含まれるが、当時の寺院の存否やその関係にまで及び興味深い。

この他に7世紀の飛鳥藤原地域の木簡群について検討したのは鶴見泰寿である。鶴見は宮都出土木簡では文書様式の規定や貢進物付札の地名の問題について検討している（鶴見1998）。

錢貨論

錢貨をめぐる研究は飛鳥池遺跡から富本錢の鑄造遺構が確認されたことによって、新たな研究の段階を迎えた。当該年間以前に平城京で奈良時代の錢貨と共に富本錢が出土、これが奈良時代の厭勝錢という認識が生まれた（松村1989）。その後富本錢は1991年と1993年に藤原京の条坊道路側溝から出土、藤原宮期まで遡ることを判明し、筆者もこれを報告したことがある（奈文研1992a）。これによって富本錢と和同開珎、無文銀錢との関係が注目されることになる。これらの成果を踏まえ、この時期積極的に錢貨論を展開したのは、藤井一二・東野治之・三上隆三・松村恵司である。藤井は天武紀にみえる「銀錢」「銅錢」を無文銀錢と古和同と推定して

おり(藤井1991)、東野は富本銭・無文銀銭を共に和同開珎に先行する厭勝銭とした(東野1997)。三上は和銅以前の鑄銭司は実際は機能しなかったとし「銀銭」を厭勝用に製作した無文銀銭とみなした(三上1998)。松村は日本書紀にある銅銭を富本銭にあて、厭勝銭ではなく、最古の鑄造銭貨の可能性を指摘した(松村1999a)。その後、1999年に飛鳥池遺跡で富本銭の鑄造が確認され、その年代が和同開珎を遡ることが判明した。また、松村はさらに富本銭は藤原京造営に、和同開珎は平城京造営の為の銭貨とし(松村2000a・2000b)、その鑄造技術の検討も行っている(松村1999b)。

土製品論

土製品では千田剛道が日本出土の獣脚硯を分類し、さらに百済・新羅・唐の製品とを比較している(千田剛1995)。その形態から日本出土の獣脚硯は各国からの舶載品と日本で製作されたものとした。

工房遺物論

工房関係の遺物の検討は飛鳥池遺跡出土遺物の検討が主流を占める。まず飛鳥池工房関係では、ガラス埴塼・ガラス玉鑄型・原料が出土、飛鳥時代のガラス生産工程が明確になった(飛鳥資料館1992b・川越1993・松村1999c)。特に、ガラス埴塼は内型づくりで、3類に分類できることや、これに蓋が伴うことも判明した。同様の埴塼は藤原京・平城京でも出土しているが、さらに滋賀県中畑遺跡でも出土、ガラス埴塼が律令政府と密接な関係にあることも指摘した(相原1993)。金・銀製品を製作した埴塼及び製品も出土している(松村2000c)。銅製品に関しては海獣葡萄鏡の破片が出土したことを受けて、飛鳥資料館では「鏡をつくる」という展覧会を開催した(飛鳥資料館1999a)。そして鉄に関しては様と製品が出土しており、発注形態の解明にも寄与している。漆製品については飛鳥池遺跡でも出土しているが、その漆の貯蔵流通の鍵をにぎるのは飛鳥京跡である。宮外で漆容器を大量に投棄した土坑が多く出土し、その流通センター的機能が示唆された(明日香村2000)。

石器論

飛鳥地域では石器に関わる研究は皆無に等しい。発掘調査ではサヌカイト剥片及び石鏃は稀に出土するが、これらを用いた研究は管見ではない。ただ、資料紹介であるが縄文時代草創期の尖頭器の出土は、桧前脇田出土例飛鳥池東方遺跡例とあわせて飛鳥では3点目にあたる(水戸部・松村1999)。これは飛鳥地域に於ける最古の出土遺物として重要である。

石造物論

飛鳥の石造物の研究はこれまでに長い歴史がある。特に石造物全般にわたって検討を加えてきたのは猪熊兼勝である(猪熊1981~1983)。しかし、当該年間前半については石造物そのものの研究は少ない。その中で1998年度には宮内庁によって猿石の保存修理が始まり、これに伴って宮内庁・榎考研の共同調査として、猿石が調査された。さらに1999年度には飛鳥京跡苑池遺構で石造物が、翌年には酒船石遺跡で亀形石槽が発見されている。亀田博は酒船石の性格を古墳時代の導水施設と関連させており、(亀田1995c)、猿石については伎楽を模したものとした(亀田1999a)。さらに亀田が調査を主導した飛鳥京跡苑池遺構で石造物が発見されたことを受けて、

大正年間に出土していた「出水酒船石」が苑池に伴う石造物であることが判明した。出水酒船石の出土の経緯については網干1999bに詳しいが、この調査で出水酒船石の用途と構造が判明したことは重要である。謎の石造物ひとつが解明されたと同時に未だ未知の新たな石造物の出土も期待させるものである。さらに酒船石遺跡では亀形石槽が原位置で検出され、導水施設の構造をとることが判明した。この発見では石造物の存在よりも、亀の造型に注目が集まり、亀の造型が道教思想に基づく形態であるとし、ここから遺構・遺跡の性格を決定する見解が多く占めた。相原嘉之は水使用の石造物を出土した石神・苑池・酒船石遺跡について、石造物の構造と遺跡の立地から、同じ水利用の石造物でも、それぞれ異なる性格をもつとした（相原2000b）。

V. 関連諸科学

自然科学

自然科学分析では飛鳥池遺跡から出土した遺物の科学分析が多い。肥塚隆保はガラス罎埴あるいはガラス玉鑄型に付着したガラスの成分分析を行っている。そこでは鉛ガラスの成分が明らかになり、それ以前のガラスがソーダガラスであることから、我が国の国産ガラスは鉛ガラスであったことが判明した（肥塚・平尾・川越・西口2000）。また、富本銭の分析ではアンチモンという特殊元素が含まれており（村上・松村・黒崎1999、村上2000a）、これは古和同銭にもみられる元素であることから、初期貨幣の製作段階に用いられた合金であることも明らかとなっている（村上・肥塚・沢田1997）。一方、金銀製品と罎埴の分析により村上隆は貴金属生産工程の一部を解明している（村上2000b）。

石材分析

飛鳥地域における石材同定については奥田尚が積極的に行っている。奥田は酒船石遺跡から出土する凝灰岩質細粒砂岩の産出地を天理市豊田山と特定し、日本書紀に記される記載との照合している（奥田1994）。また、古墳石材や寺院使用の石材についても同定と検討を行っている（奥田1995a・1995b）。

花粉分析

この時期、花粉分析を中心とした微遺体分析はいくつかの調査地において実施されているが、明日香村の調査では、金原正明の協力を得て、分析資料の蓄積のために出来る限り実施するように心がけている。この中には奈良国立文化財研究所の実施した飛鳥寺南方遺跡の石組暗渠からはベニバナが確認された。このことからこの上流にベニバナから抽出した染料を利用した染色工場の存在が想定されるのである（奈文研1995c）。一方、当該期間に特に注目されたのはトイレ遺構である。それまで不明であった汲み取り式トイレ遺構を、藤原京右京七条一坊西北坪の調査において、はじめて科学的に確認された（奈文研1992b）。この遺構からは糞虫・食べかす・寄生虫卵などが検出され、トイレ遺構と断定されたのである。この発見を受けて、トイレ遺構の判定方法が確立し、平城京・藤原京の調査で条坊側溝に取り付く水洗トイレも確認された。これらの成果を受けて、黒崎直は古代から中世のトイレ遺構を整理し、汲み取り式・水洗式・移動式トイレについて検討し、現時点での到達点と課題を提示している（黒崎1998a）。

VI. 保存と整備

文化財行政・整備計画

明日香村は1966年に古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法（古都保存法）の制定に伴い古都指定され、1970年に奈良県風致条例、1980年には明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備等に関する特別措置法（明日香村特別措置法）を制定、これらによって明日香村行政界全域において文化財と歴史的風土の保存の網がかけられている。このようにひとつの行政界全域に規制がなされた都市はない。これらの法律を受けて1976年に明日香村総合計画を策定、10年後の1987年に「調和と活力のあるヒューマンビレッジ・明日香—歴史と文化の里づくりをめざして—」を将来像とする第2次明日香村総合計画を策定した（明日香村1988a）。これは歴史的風土の凍結的保存を前提とした上で、各分野のバランスをとり、村民生活の安定と向上をめざすものであった。しかし、近年歴史的風土の保存をめぐる文化財や景観の一体的な保存の必要性、農林業等との調和の問題、国民的な参加の必要性が指摘されるようになり、古都保存のあり方も新しい段階を迎えている。これらの課題を受けて、1999年には第3次明日香村整備計画が策定された（明日香村1999a）。明日香村の将来像を「産まれてよかった 住んでよかった 来てみてよかった ふるさと明日香」とし、村づくりの基本理念テーマを「健やかで豊かな生活を楽しむ」「明日香の歴史・万葉への憧憬を育む」「饗しの交流経済を興す」の3テーマとし、文化財関係では2番目のテーマを受け、凍結保存から創造的活用へということが提起された。

この3次整備計画を受けて提唱された「明日香村まるごと博物館構想」は、明日香村にある文化財・景観、そして住民を一体となして、エコミュージアム構想を掲げたものである。従来の箱物行政から脱却し、ソフトに重点をおいた政策として注目される。

保存問題

この時期、文化財の保存運動については奈良県立万葉文化館建設に伴う飛鳥池遺跡の保存運動が活発であった。飛鳥池遺跡の調査は最初1991年度に近世ため池であった飛鳥池の埋め立てに伴う事前調査で発見された。当時、ガラスや銅・鉄製品などを製作していた、飛鳥でも有数の工房遺跡ということが判明した。その後、遺跡は埋没し、静かに眠るはずであったが、1996年、奈良県による万葉集の博物館が計画された。その事前調査として4年、14,000㎡の調査が始まった。その成果については、すでに記してきたが、調査が進むにつれて、当遺跡は飛鳥時代の律令国家形成過程をつぶさに解明できる遺跡であり、出土遺物からは当時の工房先端技術や生産体制が判明した。調査終盤になって富本銭を鋳造していたことが判明、和同開珎よりも古い、最古の鋳造貨幣であることもわかった。さらに万葉文化館のアクセス道路を兼ねる村道建設に伴う酒船石遺跡の調査では、亀形石槽を含む導水施設が発見され、現地説明会には1万6000人もの人々が押し寄せた。これらの成果を受けて、飛鳥池遺跡の保存運動が活発化した。万葉文化館は設計変更をしながらも現地で建設がなされた（直木・鈴木2000、2001）。対称的に、亀形石槽の調査地は道路建設を一時凍結し、周辺の範囲確認を継続した。その結果、亀形石槽の周辺を露出し、仮整備を行った。

この他にもカナヅカ古墳では特別養護老人ホームの建設計画があがったが、関係機関での協議の結果、別地に計画を変更し、1995年度から3年間にわたって古墳の範囲確認調査を実施した。また、坂田寺跡では回廊内側で、住宅建設計画があがり、事前調査をした結果、回廊を確

認した。その後、代替地など地権者との協議もなされたが不調に終わり、現在は住宅が建設されている。

史跡指定

明日香村には2005年12月現在、国史跡指定20件（うち特別史跡史跡3件）494,122㎡、県史跡2件、村史跡2件がある。当該年間に新たに史跡に指定、あるいは追加指定されたものには伝飛鳥板蓋宮跡・定林寺跡・キトラ古墳と、県指定の紀寺の4件がある。

定林寺は敷地東南部657㎡を所有者の同意を得て、指定・公有化をはかった。キトラ古墳は2000年7月31日に史跡指定、同11月24日に特別史跡に指定された。同古墳は1997年度の小型カメラの探査によって、高松塚古墳につづいて玄武・青龍・白虎・天文図壁画が確認されており、我が国において極めて重要なことから指定された。その範囲は墳丘のみならず、その周囲の地形（墓域）を含めた4301㎡の地域が指定されている。紀寺跡はすでに寺域の西半分が奈良県立橿原公苑明日香庭球場の緑地公園として1970年度に公有化されていたが、1991年に伽藍東半に住宅建設計画があがり、これに対応すべく、1993年3月5日に県指定史跡に指定し、公有化をはかった。伝飛鳥板蓋宮跡では内郭の北東隅部の井戸周辺はすでに史跡指定され、環境整備されているが、今回、内郭前殿の東に接する土地の指定同意を得ることができ、1992年4月21日に463㎡を追加した。

これら史跡指定されることによって文化財保護法のもとに遺跡が守られることになるが、遺跡の範囲に対して、指定範囲が著しく狭い遺跡もあり、課題として残された。

環境整備

この時期、明日香村内ではマルコ山古墳・伝飛鳥板蓋宮跡・奥山久米寺跡・酒船石遺跡の整備がなされている。

マルコ山古墳は1988～1995年度まで整備事業が行われ、終末期古墳の当時の姿を復元しており、古墳の外観をみることができる（明日香村1996b）。伝飛鳥板蓋宮跡は1994年度に内郭東南隅部を整備している。整備手法としては石組溝の復元と建物柱位置の丸太表示そして、張芝舗装である。内郭北東隅の整備地とあわせた手法をとるが、解説版に復元イラストを使用し、来訪者の理解を助けている。奥山久米寺は現久米寺の境内地に礎石の残る塔基壇があった。すでに半数以上の礎石が残っていたことから、礎石上面までの盛土を施し、張芝とし、基壇縁を明示している。また、酒船石遺跡では、1992年度に発見された石垣部分を露出見学できるように、石材の強化を行った後、仮設の覆屋を建てて、見学出来るようにしている。

明日香村内では石舞台古墳や川原寺跡のように、奈良県あるいは国直営による遺跡整備が行われていたが、1974年度の中尾山古墳以降、単年度事業としての古墳整備を行ってきた。1981年度以降、水落遺跡の整備を6年間実施し、続いてマルコ山古墳の整備にかかった。遺跡の整備とは文化財を地域の中でよりよく活用し、理解を求めるひとつの手段であるが、昨今は全国的にみても、実物大復元が注目されており、明日香村でも露出展示が強く言われている。その良い例が酒船石遺跡の亀形石槽であろう。

(平成17年12月18日現在)

種 別	名 称	所 在 地	面 積 (㎡)	指 定 年 月 日	所 有 者	管 理 団 体	備 考
特別史跡	石舞台古墳	島 庄 祝 戸	12,317	昭10.12.24 昭27.3.29 特別史跡	国 奈 良 県 明日香村	奈 良 県	
特別史跡	高松塚古墳	平 田	913	昭47.6.17 昭48.4.23 特別史跡	国	明日香村	壁画は国宝指定
特別史跡	キトラ古墳	阿部山	4,301	平12.7.31 平12.11.24 特別史跡	国 明日香村 民有地	明日香村	
国 史 跡	川原寺跡	川 原	73,839	大10.3.3 昭41.6.21 追加 昭63.3.14 追加	国 奈 良 県 明日香村 民有地	明日香村	
国 史 跡	大官大寺跡	小 山	46,642	大10.3.3	国 明日香村 民有地	明日香村	
国 史 跡	牽牛子塚古墳	越	396	大12.3.7	明日香村	明日香村	出土遺物は重要文化財
国 史 跡	中尾山古墳	平 田	987	昭 2.4.8	明日香村	明日香村	
国 史 跡	酒船石遺跡	飛 鳥 岡	31,464	昭 2.4.8 平16.9.30 追加 平16.9.30 名称変更	国 奈 良 県 明日香村 民有地	明日香村	
国 史 跡	飛鳥寺跡	飛 鳥	46,184	昭41.4.21	奈 良 県 民有地	明日香村	
国 史 跡	橘寺旧境内	橘	95,245	昭41.4.21	奈 良 県 民有地		
国 史 跡	定林寺跡	立 部	17,163	昭41.2.25 平 5.3.4 追加	国 民有地	明日香村	
国 史 跡	岩屋山古墳	越	1,125	昭43.5.11	明日香村	明日香村	
国 史 跡	伝飛鳥板蓋宮跡	岡	9,308	昭47.4.10 昭58.1.12 追加 昭58.5.19 追加 平 4.4.21 追加	奈 良 県 民有地	奈 良 県	
国 史 跡	飛鳥水落遺跡	飛 鳥	1,219	昭51.2.20 昭57.3.23 追加	明日香村	明日香村	
国 史 跡	飛鳥稲淵宮殿跡	稲 淵 祝 戸	12,750	昭54.3.20 昭56.5.16 追加 平16.2.27 追加	国 民有地		
国 史 跡	マルコ山古墳	真 弓	2,735	昭57.1.16	明日香村	明日香村	
国 史 跡	飛鳥池工房遺跡	飛 鳥	19,981	平13.8.13	奈 良 県	奈 良 県	
国 史 跡	檜隈寺跡	檜 隈	7,611	平15.3.25	民有地	明日香村	
国 史 跡 名 勝	飛鳥京跡苑池	岡	27,413	平15.8.27	奈 良 県 民有地	奈 良 県	
国 史 跡	岡寺跡	岡	82,865	平17.8.29	民有地		
県 史 跡	豊浦寺跡	豊 浦		昭52.3.22	民有地		
県 史 跡	紀寺跡	小 山		平 5.3.5	奈 良 県 民有地	奈 良 県	
村 史 跡	飛鳥川の飛石	稲 淵		昭52.4.1			
村 史 跡	南淵請安先生の墓	稲 淵		昭52.4.1			

宮内庁陵墓：欽明天皇檜隈阪合陵（平田） 天武・持統天皇檜隈大内陵（野口） 文武天皇檜隈安古岡上陵（栗原）
吉備姫王檜隈陵（平田） 良助親王墓（冬野） カナ塚（平田） キヨ塚（平田） 鬼の俎・雪隠（野口・平田）

第3表 明日香村内史跡地一覧表

展覧会・講演会

文化財の啓蒙普及として、飛鳥をテーマとした展覧会は、全国的にも多くあり、講演会も多様である。明日香村内にある歴史系博物館としては1975年に開館した奈良文化財研究所飛鳥資料館があり、春秋二回、飛鳥にかかわる特別展を開催し、あわせて講演会も実施している。また、2000年4月には明日香村の名誉村民でもあった犬養孝を顕彰する「南都明日香ふれあいセンター 犬養万葉記念館」が開館した。犬養孝寄贈の図書・資料及び万葉集に関する図書・調査研究資料等を収集展示している。さらに1999年2月には明日香村教育委員会文化財課に併設して、埋蔵文化財展示室が開館した。明日香村教育委員会が調査した遺物を中心にキトラ古墳模型などが展示されている。また、明日香村教育委員会が実施した発掘調査の成果を公開する明日香村発掘調査報告会を1998年度より毎年開催している。

VII. 総括—10年の調査研究の動向と課題—

本稿では1991年から2000年までの文化財研究について紹介してきた。ここではこの10年間の総括を踏まえ、次の10年を展望して、まとめにかえたい¹⁾。

遺跡研究において、宮都論は伝承飛鳥板蓋宮跡の内郭中心部の調査が始まった。これまで唯一未調査であった正殿地区の構造解明によって、他宮殿との詳細な比較が可能となる。また、この宮殿の四隅を確定することによって、飛鳥地域における空間利用の実態にもつながろう。この意味で榎原考古学研究所が2003年から5カ年計画で始めた調査成果に期待がかかる。都城論については藤原京の北限・南限の確定が急務であろう。特に南限については諸説があり、飛鳥地域との関わりにも大きな影響を及ぼす。さらに近年、平城京九条大路の南方で確認された京外条坊遺構とのかかわりでも重要である。一方、2000年から開始された藤原宮朝堂院地区の調査は、これまで古文化研究所の調査において概略は確認されていたが、詳細な構造や変遷など新たな成果が期待でき、他都城との比較検討において重要である。初期朝堂院の実態としても不可欠であり、飛鳥と平城宮とをつなぐ成果が期待できる。苑池論は飛鳥京跡苑池の解明が大きな視点となる。この苑池の分析を東アジア的な視野における比較が求められる。また、苑池を一括に扱うのではなく、その構造や機能・変遷についての分類・系譜の解明も必要となる。寺院論では伽藍中枢の構造に関してはこれまでの調査において解明されてきたが、その造営時期や氏族だけでなく、寺域周辺部の解明が待たれる。また、山田寺跡・吉備池廃寺跡の報告書が刊行されたが、他の寺院の調査報告書の刊行と総括も期待される。工房論では飛鳥池工房の詳細な検討が必要である。この出土遺物の分析によって、新たな事実や具体的な生産活動の実態にせまることができよう。また、川原寺北辺においても寺院附属工房が確認されており、両者の比較においても、当時の工房形態の解明につながるだろう。古墳論ではキトラ古墳・高松塚古墳の調査によって終末期古墳の研究が進んだ。さらにマルコ山古墳が六角形であったり、石のカラト古墳の正式な報告書が刊行されるなど、これらの成果は互いにリンクしながら研究が進む。飛鳥前史は飛鳥文化を芽生えさせた土壌という意味で、弥生時代については清岡廣子によって一定の整理がなされたが、古墳時代の実態整理が待たれる。これに対して、飛鳥時代以降の解明も必要となり、現在の歴史的風土と呼ばれる景観がいつ、どのような経緯で成立していったかも追求しなければならない。

遺物研究において、土器論では先の7世紀の土器編年研究は落ち着いてきている。しかし、土器群、特に基準資料の公開によって、先の編年基準の共有が図られることが必要であろう。

その意味で山田寺下層土器群や大官大寺下層土器群が提示されたのは重要である。瓦埴研究では古代瓦研究会の一連の研究会が評価される。これまでの瓦研究の現状と課題について整理しており、今後も継続が必要である。文字資料論では新たな文字史料の出土と、これまでに出土している木簡の再検討が必要であろう。銭貨論では富本銭の出土によって和同開珎・無文銀銭を含めて初期銭貨の研究が進むことが期待される。すでに松村恵司・栄原永遠男によって初期貨幣史の再整理・検討が進められている。土製品論では様々な遺物があるが、いずれも各遺物における整理と研究が必要である。工房遺物論では飛鳥池工房の出土遺物の分析が中心となる。各種の工房関連遺物それぞれ、さらには総合的な分析によって当時の生産体制の復元にもせまれよう。石器論では縄文草創期の石器が出土しているが、弥生・古墳時代の石器の分析、さらにその歴史的な位置づけが期待される。石造物論では新たに現位置での石造物の出土がみられ、新たな研究段階に入っているが、その製作年代・製作技法・性格などの解明が必要である。

関連諸科学では自然科学分析が重点になる。これまでの文化財調査では考古学的な分析が主流であった。自然科学分析も増してはきているが、今後の調査ではより密接な連携により、これまでになかったデータの提供がみられる。特に、近年では年輪年代測定法やC14測定法の精度や技術があがっており期待される。石材・花粉分析については、これまでにデータの積み重ねがあるが、より広範囲なデータ取得とこれを利用した当時の環境復元などが課題となる。

保存と整備については、整備計画の推進があげられるが、飛鳥の位置づけには文化財だけでなく、風致景観も重要な視点である。また、村内全域を対象とした文化財の保存管理計画の策定も急務であり、これらをいかに関連づけて推進するかは課題である。保存問題についてはキトラ古墳壁画・高松塚古墳壁画の保存問題が大きな課題となる。史跡指定についてはすでに酒船石遺跡・岡寺が指定されており、甘樫丘・鳥庄遺跡など未告示で残っている遺跡の解明が急務である。環境整備については檜隈寺講堂の整備を実施しているが、国営公園キトラ古墳周辺地区などの整備に伴って、キトラ古墳の整備が計画されている。展覧会・講演会では、最新の成果を取り込んだ展覧会・講演会が必要とされる。すでに飛鳥資料館では吉備池廃寺・飛鳥池工房・飛鳥の奥津城など調査成果に関連したタイムリーな展覧会を実施しているが、調査成果の公開という点でより重点を置く必要がある。また、奈良県立万葉文化館が2001年に開館しており、万葉集に関する展覧会を開催しているが、犬養記念館との連携が必要であり、万葉風土の研究ともかかわろう。

このように今後10年間の研究に期待する点は多くある。すでに21世紀の最初の10年も、5年目を迎えている。以前にも記したことがあるが、20世紀は発掘調査によって、次々と新しい事実が判明し、歴史が塗り替えられてきた時代であった。新しい世紀を迎え、デジタルカメラによってキトラ古墳朱雀壁画が発見されたり、年輪年代測定法によって15年前に出土した雷丘東方遺跡の井戸枠の伐採年代が確定したり、1879年に豊浦の古宮遺跡出土の金銅製四環壺に鳳凰が刻まれていることが判明した。このように21世紀の幕開けは、最先端科学技術によって、次々と新たな成果があがっており、新世紀の考古学を象徴しているかのようであった。しかし、2003年に高松塚古墳壁画に黒カビが発生し、壁画自体も劣化が著しいことが判明した。その保存修理には石室を解体し、壁画を修理せざらざる得ない状況となっている。高松塚古墳は単に国宝、特別史跡という文化財というだけでなく、飛鳥にとって、我が国にとっても文化財保存の象徴

である。一方、同じ壁画古墳であるキトラ古墳でも、発掘調査中からカビが発生。壁画自体も落下の可能性が高いことから、はぎとり修理がなされている。これまでの壁画古墳の現地保存の道に暗闇がさしている。現代科学は壁画古墳の保存に無力なのであろうか。今こそ文化財学と自然科学とが一致協力して文化財保存に立ち上がらなければならない時である。そして今一度、文化財とは何か？保存とはなにか？を立ち止まって考えるべきである。文化財を文化財として活かすために、これまでの「凍結的保存から創造的活用へ」も提起されている。飛鳥地域における文化財保存は、単に文化財だけの問題ではなく、地下の文化財と地上の景観、そしてそこに住む住民が一体となって「飛鳥」を守っているのである。他の地域とは異なる文化財保存施策の推進が必要である。
(平成17年10月26日稿了)

註

- 1) 2000年4月14日、橿原考古学研究所資料室長であった亀田博氏が亡くなられた。亀田氏は飛鳥の発掘調査に永く関わっており、飛鳥地域の研究も数多く手がけてこられていた。今後の研究の進展が楽しみであったが、残念である。

参考・引用文献（文献目録以外のものを記した）

- 相原嘉之1993 「草津市中畑遺跡出土ガラス埴塼をめぐる諸問題」『滋賀文化財だより185』滋賀県文化財保護協会
 秋山日出雄1981 「藤原京の京域考—内城と外京の想定—」『考古学論攷 橿原考古学研究所紀要 第4冊』
 明日香村1988a 『第2次明日香村総合管理計画』
 明日香村教育委員会1988b 『明日香村遺跡調査概報 昭和62年度』
 明日香村教育委員会2001 『明日香村遺跡調査概報 平成11年度』
 明日香村教育委員会2002 『明日香村遺跡調査概報 平成12年度』
 明日香村教育委員会2003 「飛鳥の考古学図録① 発掘された飛鳥—20世紀の飛鳥考古学—」明日香村
 阿部義平1986 「新益京について」『千葉史学 9号』千葉歴史学会
 猪熊兼勝1981～1983 「飛鳥の石造物①～⑧」『季刊明日香風 創刊号～第8号』飛鳥保存財団
 江浦 洋1988 「日本出土の統一新羅系土器とその背景」『考古学雑誌 第74巻第2号』日本考古学会
 岡崎晋明1987 「飛鳥前史」『古代を考える 飛鳥』吉川弘文館
 小笠原好彦1980 「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」『考古学研究 第27巻第2号』考古学研究会
 小澤 毅1988 「伝承板蓋宮跡の発掘と飛鳥の諸宮」『橿原考古学研究所論集 第九』吉川弘文館
 押部佳周1988 「飛鳥京と新益京」『古代史論集 上』塙書房
 尾野善裕1997 「東海」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東5 7世紀の土器—』古代の土器研究会
 橿原考古学研究所2002 『飛鳥京跡苑池遺構調査概報』
 橿原考古学研究所2003 『奈良県高市郡明日香村 一細川谷古墳群—上5号墳』
 橿原市教育委員会2001 『橿原市埋蔵文化財発掘調査概報 平成12年度』
 橿原市千塚資料館2001 『かしはらの歴史をさぐる8—平成11年度埋蔵文化財発掘調査成果展—』
 亀田修一1982 「百濟古瓦考」『百濟研究12』忠南大学校
 亀田 博1984 「飛鳥京跡小考」『橿原考古学研究所論集 第六』吉川弘文館
 亀田 博1987 「七世紀後半における宮殿の形態」『横田健一先生古希記念 文化史論叢 上』横田健一先生古希記念会
 岸 俊男1969 「京域の想定と藤原京条坊制」『藤原宮』奈良県教育委員会
 楠本哲夫1983 「藤原京の京域」『橿原市 院上遺跡』奈良県教育委員会
 佐藤 隆1997 「難波」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東5 7世紀の土器—』古代の土器研究会

- 菅谷文則1983 「飛鳥京跡（伝板蓋宮跡）の敷石と『石上山』砂岩磚」『関西大学考古学研究室開設30周年記念 考古学論叢』関西大学
- 直木孝次郎・鈴木重治2001 『飛鳥池遺跡と亀形石—発掘の成果と遺跡に学ぶ—』ケイ・アイ・メディア
- 納谷守幸2004 「軒丸瓦製作手法の変遷—飛鳥地域出土の7世紀前半代の資料を中心として—」『明日香村文化財調査研究紀要 第4号』
- 奈良国立文化財研究所1996b 『古代都城制研究集会第1回報告集 古代都城の儀礼空間と構造』
- 奈良国立文化財研究所1997b 『古代都城制研究集会第2回報告集 都城における行政機構の成立と展開』
- 奈良国立文化財研究所1998c 『古代都城制研究集会第3回報告集 古代都市の構造と展開』
- 奈良文化財研究所2001 『奈良文化財研究所紀要2001』
- 奈良文化財研究所2002 『山田寺発掘調査報告』
- 西口壽生1983 「土師器の地域色—6・7世紀の畿内とその周辺—」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 西 弘海1978 「藤原宮西方官衛出土土器の編年と西方官衛についての考察」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所
- 日本考古学協会2005 『第3次埋蔵文化財白書—遺跡の保護と開発のはざま—』ケイ・アイ・メディア
- 菱田哲郎1986 「畿内の初期瓦生産と工人の動向」『史林 第69巻3号』京都大学史学会
- 松村恵司1989 「富本錢について」『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所
- 三好美穂1996 「大和」『古代の土器4 煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会
- 吉川真司2001 「飛鳥池木簡の再検討」『木簡研究 第22号』木簡学会